

拝啓

赤い梅の葉は散り去り、このところの落ち葉はきのり  
メインが黄色いところの葉になりつつあります。

過日は急にお参りさせて頂いたにもかゆらず  
お母様、お姉様（妹様よりよく）に暖かくお迎え  
いただき、本当にありがとうございます。

また、お職様よりごていぬいぬお手紙を頂戴し、  
ただにも、たいなく思っております。

当日、お母様にお電話で教えて頂いたとおりに  
駅より線路沿いの道を行き、踏切を渡ると左側に  
見覚えのある墓地が。小エー頃、両親と墓参りした時の  
記憶がぼくと開けたように蘇ってきました。何年ぶり  
でしたか、両親の「お墓のことは心配いらはないか」との  
話がありました。たゞお寺に伺うのは初めてでした。

が、境内に入らずにいた。途端に、両親の言っていた  
意味がひいひいとわかってきました。手入水の行き届いた  
お庭。暖かいお母様、お姉様の声も聞こえなし。短い時間  
でした。朝早く、バタバタと東京を去りました。私には  
じんわりと染み渡るような安らぎ。暖かいお母様の感  
動でした。

一月、父がそとへ、一時は東京の感染者が二千人を越えて  
あり、東京から地方へ向かうことは誰もお勧めしな  
かった。鈴鹿の家族の希望もあり、結局、立ち合  
い。ここで、父と母と別れ。以来、自責や後悔の念が、  
父に対する想いや、複雑な思いを抱いたまま過  
して

です。宣隆寺を訪れ、ご住職が彫られた涅槃像を  
目のみたりにして、あめ、こころは父は安心して眠っている  
と言われぬ守備感に包まれました。両親の「お墓は  
大又夫だ」との言葉の意味も、両親の気持ちも、今でも  
理解できた様に感じられ、父と繋がることよくな感じに  
なりました。

です。今は父はニルヴァーナ  
森に眠り、母は認知症で施設にあり、よりやくその苦しみ  
から解放されたようにも思っています。

帰り、長爪の浦駅でペットのお墓の看板が目に入り  
ました。我が家では、十八才になる犬を、スズキを日ル介護して  
あり、ご住職も、と動物好きで、さうさうの「だう」はと

再度暖かい気持ちにママで頂いて電車に乗り込ませました。  
の实家には、もはや両親がいはいたため、何だか寂しい  
思いもありました。ほくのわがな、暖かい宣隆寺を訪れ  
ママで頂いただけに、何故か、もう一つの政郷を悼み、  
よりな、そんな不思議な気持ちになりました。また是非、  
お参りママで頂きたいと思っております。

十一月も終盤、ここからは慌ただしく年末へと向かう日。  
ご住職様、ご家族の皆様、ますますお忙しくなる中、このことと  
思います。朝晩の冷え込みも厳しくなる季節柄、いよいよ、  
くしくいも、ご自愛下さいませ。

感謝を込めて。

十一月二十四日